

公表 事業所における自己評価総括表

○事業所名	Brighten School Daikanyama		
○保護者評価実施期間	2025年11月22日		2025年12月5日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	37人	(回答者数)
○従業者評価実施期間	2025年11月22日		2025年12月5日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6人	(回答者数) 6人
○事業者向け自己評価表作成日	2026年1月30日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	レッジョ・エミリア・アプローチを取り入れ、子どもたち一人ひとりの「なぜ?」「やってみたい」という気持ちを大切にしたい支援を行っています。 主体的な学びを引き出す独自の5ステップ (EXPLORE/INQUIRE/ADJUST/EXPLORATION & PROJECTS/DOCUMENT) を強みとし、子ども一人ひとりの探究心を育みます。	・子どもたち一人ひとりの興味の幅に合わせて、さまざまな素材を用意しています。 ・プロジェクトの導入では、実際に触れてみる・調べてみる・考えたことを発表するなどの経験を大切にし、すべての子どもが「楽しい」「やってみたい」と感じられるような関わりを心がけ、子どもたちの興味や関心が広がるような素材の提供や環境づくりを行い、主体的な学びにつながる探究活動を大切にしています。	・子どもたちの興味をより深めていけるよう、1回のプロジェクトで完結するのではなく、継続した学びにつながる取り組みを進めていきたいと考えています。 ・継続的な関わりを通して、遊びの幅を広げたり、「もっと知りたい」「やってみたい」という興味・関心をさらに深めていくことにつなげていきます。
2	ABA (応用行動分析) の考え方を取り入れ、子どもたちの行動を丁寧にしながら、安心して取り組める関わりを工夫しています。 できたことや望ましい行動を大切に、成功体験を積み重ねることで、前向きな行動が自然に増えていくよう支援しています。	・子ども一人ひとりの行動の背景を丁寧にしながら、無理なく取り組める関わり方を工夫しています。 ・できたことや頑張った過程を大切に、成功体験が積み重ねられるような声かけや関わりを行っています。 ・安心できる環境の中で、前向きな行動が自然に増えていくことを大切にしています。	・子どもの状態や気持ちに合わせて、支援のタイミングや方法を柔軟に調整しています。 ・職員間で行動の捉え方や関わり方を共有し、一貫性のある支援につなげています。
3	安心・安全な環境の中で、子どもたちが自分の気持ちや考えを表現できるよう、一人ひとりのペースに合わせた関わりを大切にしています。 無理に言葉を促すのではなく、自然なやりとりの中で言語表出を引き出しながら、望ましい行動が少しずつ身につけていくよう支援しています。	・子ども一人ひとりの様子や気持ちを丁寧に観察し、関わり方や声かけを意図的に選んでいます。 ・安心・安全な環境を整え、落ち着いて気持ちや考えを表現できる土台づくりを行っています。 ・無理に言葉を促すのではなく、日常のやりとりの中で、自然に言語表出が生まれる機会を大切にしています。	・職員間で支援の視点や関わり方を共有し、一貫性のある支援を行うよう努めています。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	部屋の使い分けについて、現在は十分に構造化できていない部分があり、活動の切り替え時などにお子さまが戸惑う場面が見られることがあります。そのため、表示や環境設定を工夫し、分かりやすい空間づくりに取り組んでいきたいと考えています。	・日々の支援を優先する中で、環境の構造化や部屋の使い分けを十分に進めきれないこと	・室内表示や写真、色分けなどを活用し、部屋や活動内容が分かりやすい環境構成を進めていきます。
2	現在、作業療法士や理学療法士など専門職の配置はありませんが、職員は研修や学びを通して知識を深めながら、日々の支援に取り組んでいます。一方で、より専門的な助言については今後の課題と考えており、必要に応じて外部機関との連携も検討していきます。	・人員体制の都合により、専門職を配置できていないこと ・職員の経験や専門分野に差があり、知識や支援方法の共有に継続的な工夫が必要なこと	・職員向けの研修や勉強会を継続し、支援に関する知識や視点の共有を図っていきます。 ・必要に応じて外部機関や専門職と連携し、保護者の皆さまへの助言や情報提供の幅を広げていくことを検討します。
3	建物の構造上、半地下という特性があり、階段が急であることやエレベーターの開閉時間が短いといった点があります。そのため、事故防止の観点から、職員の見守りや動線の工夫などを行いながら、引き続き環境面の改善に努めていきたいと考えています。	・建物の構造上の制約があり、環境整備や動線の工夫に限界があること	・階段やエレベーター使用時の見守り体制や動線の見直しを行い、安全面への配慮を強化していきます。